

小学部の研究

自己を受けとめ表現し、他者を認める子どもを目指した
 自立活動の時間における指導「にじいろタイム」の授業づくり
 -子どもの発達を踏まえた目標設定と評価に視点を当てて-

提案者 川添 直人

1 学部研究主題設定について (紀要pp. 21-27)

小学部では、子どもたちの実態，前次研究の課題，社会の背景などから前次研究から引き続き自立活動の時間における指導の一つである「にじいろタイム」を取り上げて授業実践していくことにした。そのことが「自己を受けとめ表現し、他者を認める姿」を目指すことになり、ひいては全体研究主題にある「今を，将来をよりよく生きていく姿」にもつながると考え，実践を通して研究推進することにした。

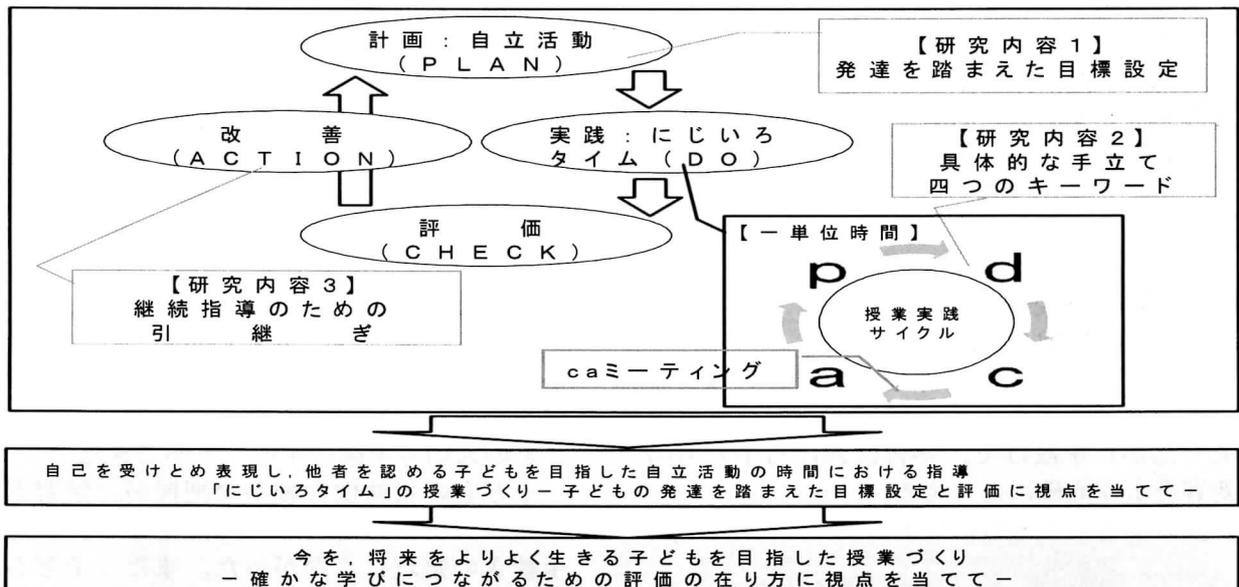
2 研究内容と方法 (紀要pp. 28-30)

研究内容1：自立活動の時間における指導の一つである「にじいろタイム」の指導プログラムを見直し，目標設定の手続きを整理する。

研究内容2：子どもの発達を踏まえた目標設定による授業実践と評価の在り方を探る。

研究内容3：中学部における指導の継続性を目指した学部間の引継ぎの在り方を探る。

3 研究の実際 (紀要p. 30)



研究内容1

1 にじいろタイムの指導プログラム (紀要pp. 31-32)

指導プログラムを作成するに当たっては，教育的ニーズ等によって3グループ（おひさま，ほし，はな）に分け，子どもたち一人一人の発達について検討し，グループの目標や活動内容を設定することにした。その際，継続した指導を考えたときにどの年齢でも検査できる点や，子どもの全般的な発達を把握できる点などから，新版K式発達検査を子どもたちの発達を見る指標として導入した。

2 目標設定の手続き (紀要pp. 33-36)

子どもを全体としてとらえる（個別の教育支援計画）→障害の特性について考える→関係機関との連携を図り，情報を生かす→発達検査（新版K式発達検査）の結果を分析する→自立活動の目標を設定する→にじいろタイムの目標を設定する
 目標設定の手続きについて，はなグループの取組を通してまとめた。

研究内容 2

子どもの発達を踏まえて、子どもの様子や学習課題をとらえ目標を設定し、指導や支援の手立てを考え授業実践を行い、子どもの評価や授業の評価の在り方を探りたいと考えた。ここでは、おひさまグループを中心にまとめた。

【授業実践】(紀要pp. 38-40)

これまでのにじいろタイムや日常生活の中で、子どもたちはグループのねらいとすることを達成できるようになった。以下のように、一人一人の子どもの発達を踏まえた目標設定や指導及び支援の手立てを行うことにより、より様々な状況でも自分の気持ちを調整したり、自分の気持ちを表現したりすることができるようになる

- 経験によって自分の気持ちや感情が広がってきたために、不適切な言動も見られることがあるが、こうした言動を否定的にとらえず、発達の自己調整ができるようになるための準備段階であるととらえる。
- 自己コントロールの力を身に付けるに至るまで、立ち直り、自己調整、自己コントロールと丁寧にスモールステップで指導していく必要がある。
- 検査の結果からも視覚的に情報をとらえることが得意な子どもたちが多いことから、これまで行ってきた写真や映像などの視覚的な手掛かりを支援にした課題の説明を入れながら、子どもに応じて、教師が見本となる言動のモデルを示したり、気持ちに寄り添うための言葉掛けを行ったりする。
- 集団の中において、発達検査などから明確になった個の課題に応じたコミュニケーション指導の場面をこれまで以上に設定する必要がある。
- また、集団の中で、子ども自身が「もっと友達や先生に伝えたい。」「上手に伝えることができるようになりたい。」と思う状況において、教師の支えを入れつつも子ども同士で立ち直るきっかけを見付けたり、子どもたち自身が教師を介せず、友達に働き掛けるコミュニケーションを身に付けたりする場面の設定も必要である。

【評価の在り方】(紀要pp. 40-43)

これまでの研究でも、子どもの評価、指導および支援の評価、改善や目標の変更をよりよく行う授業ミーティングの在り方について検討してきた。これまでの課題をもとに、今研究ではcaミーティングを実践し、その有効性を明らかにした。子どもを複数の教師で多角的に見ることができ子どもを断片的に見るのではなく、全体的にとらえることができる。また、表れた言動だけでなく、気持ちの変容を評価するのに有効である。授業後毎回30分程度で実施でき、実務的な効率性と妥当性のバランスを考えると、おひさまグループのような授業形態(授業の流れや教師の構成など)における評価の在り方としては有効である

研究内容 3

「にじいろタイム」(ほしグループ)での取組を、どのように指導内容や課題をつなげていくかについて事例を通して検証することにした。(紀要pp. 44-46)

「にじいろタイム」で取り組んだ目標と内容について、中学部での休み時間の場面に設定して取り組む際、小学部・中学部の教師が協働して目標設定を行い、教師の働き掛けを共通することにした。そのようなことを通して、学部が違っても教師が直接会ってミーティングをすることが大切だと改めて感じた。これらの取組を通して、様々な書類等による引継ぎ(ハード面)だけでなく、学習場面等のビデオを見ながらミーティングをする(ソフト面)が重要であることが分かった。さらに、確実に引き継ぐためには、「教師同士のコミュニケーション」が重要であると考えられるようになった。

4 まとめと今後の課題(紀要pp. 47-48)

わたしたちの取組による子どもの変容を通して、学部研究主題「自己を受けとめ表現し、他者を認める子どもの姿」を振り返ってみた。次にその一部を示す。

はなグループにおいては、子どもが友達同士で誘うようになった。具体的には、シーソー遊びの際に友達の得意なものを理解した上で、誘いたい友達を選ぶことができるようになったことである。

ほしグループにおいては、劇の役を決めるときに「〇〇ちゃんと一緒にしたい」と言えるようになった。日ごろの生活においては、「ごめんね」と言うことが苦手な子どもが劇の中では言えるようになった。

おひさまグループにおいては、集団ゲームに負けても「次がある」と切り替えることができ、活動する際に、自分で自己調整することが多くなったので教師の支援が少なくても遊びができるようになった。

今後の課題は、これまで以上に自分の状況を理解しながら思いを伝えたり相手の心情を理解してかかわったりする力を高めることである。また、学習指導要領改訂に伴い自立活動の在り方の整理をすることである。